

安心・成長・自立につなげるスタートカリキュラムの工夫

～幼児期の学びや生活を踏まえた生活科の実践を通して～

与那原町立与那原小学校教諭 金城愛梨

I テーマ設定の理由

人工知能(AI)、ビックデータ、Internet of Things(IoT)、ロボティクス等の先端技術が高度化してあらゆる産業や社会生活に取り入れられた Society5.0 時代が到来しつつあり、社会の在り方そのものがこれまでとは「非連続」と言えるほど劇的に変わる状況が生じつつある。また、学習指導要領改訂に関する「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策等について(答申)」(平成28年)においても、社会の変化が加速度を増し、複雑で予測困難となってきたことが指摘されている。このような急激に変化する時代の中で、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるよう、その資質・能力を育成することが求められる。

『幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き(初版)』では、義務教育開始前後の5歳児から小学校1年生の2年間は、生涯にわたる学びや生活の基盤をつくるために重要な時期として、この時期を「架け橋期」と呼んでいる。この架け橋期を通じて、未来を担う子供に学びや生活の基盤を育み、持続可能な社会の創り手となることができる力の基礎を育み、全ての子供の可能性を引き出すためのウェルビーイングを保障し、主体的・対話的で深い学びの実現に向けて協働的に取り組むことが大切である。

沖縄県が提示している、黄金っ子応援プラン(第2期沖縄県子ども・子育て支援事業支援計画2021年)では、「全ての子どもを『黄金っ子』と位置づけ、0歳～小学校低学年(8歳)の教育・保育が充実すれば、『生活していく力、人と関わる力、学びの芽』等の生涯にわたる人格形成の基礎、学びの基礎力が培われ、本県の豊かな人材育成にも繋がる」と示されている。このように、幼児期の教育と、小学校以降の教育とを円滑につないでいくためには、子供を中心に据え、発達段階を見通した教育の充実という一貫性の基に、接続期の教育の充実を図っていくことが必要であると考えられる。

接続期の学びを充実するためには、幼児期に育まれた力が小学校教育にどのようにつながっているのか、幼小の双方の関係者がイメージを共有し、実践できるようにする必要がある。また、生活や学びの基盤を育むため、園がどのような工夫をしていくのか小学校側の理解を広げていく必要がある。加えて、幼児教育の成果を小学校教育の質の向上につなげることも必要であり、接続期の学びの連続性の観点から、遊びや生活の中の気づきから探究へという学びのプロセスを、小学校の教育課程や学習指導の在り方の改善・充実にもつなげることが重要である。

これまでの実践を振り返ってみると、保育への理解に努め、幼児期での学びを小学校でのスタートカリキュラムや授業実践の中で取り入れてきた。それらの実践をより発展させるためには、就学してくる幼児の幼児期における様子を実際に見る必要があると感じた。また、幼児期の理解を踏まえた上で、幼児期の活動を取り入れ、学びやすい環境を構成することで、児童の安心につながり、自己を発揮することができ、成長、自立していく姿につながると考える。さらに、保幼小連携担当として、幼児教育の質の意義や価値への理解について、遊びを通じた学びの重要性、先生方の環境の構成や関わり方の工夫について、職員全体へより認識を広めていきたいと感じている。

そこで本研究では、幼児期での学びや生活を踏まえた生活科の実践を行うことで、児童の安心・成長・自立につなげ、充実した小学校生活がスタートできると考え、本テーマを設定した。

Ⅱ 研究目標

幼児期の学びや生活を踏まえた生活科の実践を通して、児童の安心・成長・自立につなげるスタートカリキュラムについて実践研究する。

Ⅲ 研究の方法

各園の実践を参考に、幼児期の学びや生活を理解の上、生活科の授業に生かす。

Ⅳ 研究内容

1 スタートカリキュラムの必要性

(1) 幼児教育と小学校教育の違い

幼児期の教育は、幼児期の発達特性により、5領域の内容を遊びや生活を通して総合的に学んでいく教育課程等に基づいて実施されている。一方、児童期の教育は、各教科等の学習内容を系統的に配列した教育課程に基づいて実施されており、幼児期と児童期の教育の大きな違いと言える(表1)。そこで、児童が新しい学校生活に円滑に移行していくためのスタートカリキュラムが必要と考え、幼児期の学びや生活を踏まえたスタートカリキュラムを実践していきたい。

表1 幼児教育と小学校教育の違い スタートカリキュラムスタートブックより(2015)

	幼児教育	小学校教育
教育課程	5領域(健康、人間関係、環境、言葉、表現)を総合的に学んでいく教育課程等	各教科等の学習内容を系統的に学ぶ教育課程
時間	子供の生活リズムに合わせた1日の流れ	時間割に沿った1日の流れ
教材	身の回りの「人・もの・こと」	主に「教科書」
環境	総合的に学んでいくために工夫された環境の構成	系統的に学ぶために工夫された学習環境

(2) 学びの芽生えと自覚的な学び

無藤(2011)は、幼小接続を考える上で重要なのが、子どもの学びがどのように発展していくかを理解することだと述べている。幼小の双方の関係者が「幼児期の『学びの芽生え』から、小学校低学年の『自覚的な学び』へ」というつながりを十分に踏まえた援助や指導を心掛ける必要性を述べている。「学びの芽生え」とは、遊びの中で、楽しみ、試し、工夫し、見通しをもつというふうに、子ども自身が遊びを発展させていくことである。「自覚的な学び」とは、先生が与える課題に興味を持ち、自分の課題として受け止め、「解いてみたい」という意欲をもって学ぶことである。

また、『スタートカリキュラムスタートブック(2015)』では、スタートカリキュラムとは、「小学校へ入学した子供、幼稚園・保育所・認定こども園などの遊びや生活を通じた学びと育ちを基礎として、主体的に自己を発揮し、新しい学校生活を作り出していくためのカリキュラム」としている。

これらのことから、学びの芽生えから自覚的な学びへと連続させることが大切であり、生活科を核として楽しいことや好きなことに没頭する中で生じた驚きや発見を大切に、学ぶ意欲が高まるように活動を構成することが有効であると考え。そこで本研究では、「自覚的な学び」へつなげるために、教師主導ではなく、児童が自ら主体的に自己を発揮する姿を目指す。そのため、生活科の授業において、自己選択・自己決定の場面を設定し、児童が主体的に自己を発揮できるようにする。

(3) 安心・成長・自立とは

『スタートカリキュラムスタートブック(2015)』には、「スタートカリキュラムをやってみると、児童の安心・成長・自立につながる」と示されている(図1)。安心とは、「幼児教育の考え方を取り

入れ、分かりやすく学びやすい環境を構成することで、安心や楽しさが生まれる」と述べている。成長とは、「活動や体験を通して、学びに向かう力を育み、安心して生活することで、自分の持っている力を発揮することができ、先生や友達に認められることで、自信や意欲が生まれる」と述べている。自立とは、「自分で考え、判断し行動するようになり、6年間の学びの基盤をしっかりとつくり、夢や希望をもち、前向きに生活していくことができる」と述べている。

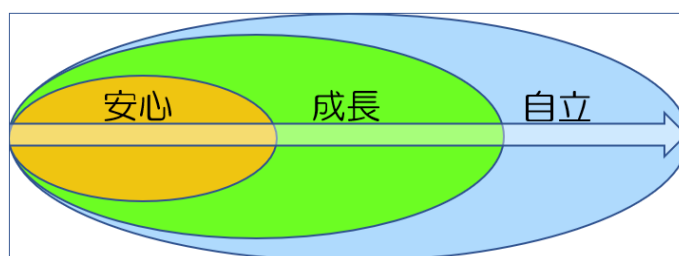


図1 スタートカリキュラムスタートブックより図式化

本研究では、「成長・自立」の部分重視していきたいと考える。幼児期の経験を小学校の学習につなげ、生活科を核とした合科的・関連的な授業を展開することで、「一人でできるようになったよ!」「友達と力を合わせるといろいろなことができるよ!」と、学ぶ力を育み、自分の力を発揮し、自信や意欲が生まれ、成長していく姿を目指していく。また、「みんなに向かって発表したいな!」「やりたいことにチャレンジするぞ!」と自分で考え、判断、行動し、自立した姿を目指していく。

(4) スタートカリキュラムの時期

これまで、幼小の円滑な接続に向けて、アプローチカリキュラムやスタートカリキュラムに取り組む体制が整えられてきた。2022年に文部科学省より推進されている幼保小の架け橋プログラムでは、教育の質を保障する為に、5歳児から小学校1年生までの2年間の「架け橋期」とし、この2年間の教育課程をさらに充実させていこうというプログラムになっている。

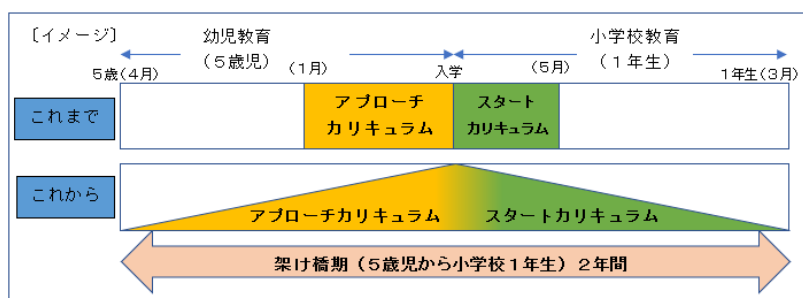


図2 架け橋期のイメージ

アプローチカリキュラムとスタートカリキュラムについて、筆者の「これまで」は、小学校入学前後に重点的に取り組むというイメージであった。小学校でも、入学から1ヶ月間をスタートカリキュラムとし、小学校での生活や学習について、慣れ、その方法を学ぶ期間と位置付けた実践であったように思われる。この実践例のように約1ヶ月間のスタートカリキュラムの時期が終了すると、その後は小学校の教科等教育課程のプログラムに入るという流れになり、「架け橋期」のプログラムを十分に生かしきれないのではないかとと思われる。

そこで「これから」では、幼児期でのアプローチカリキュラムと関連づけた学習から徐々に小学校の教育課程に移行していくことをイメージした(図2)。

このように幼児教育と小学校教育の学びの連続性により、児童の安心・成長・自立を図ることができると思われる。

2 小学校学習指導要領と幼稚園教育要領

(1) 小学校学習指導要領での幼児教育の位置づけ

『小学校学習指導要領(2018)』の学校段階等間の接続には、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた指導を工夫することにより、幼稚園教育要領等に基づく幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を踏まえて教育活動を実施し、児童が主体的に自己を発揮しながら学びに向かうことが可能となるようにすること。」と示されている。このことから、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」、「幼児期の資質・能力」を踏まえることが重要となってくる。それらを踏まえて生活科の授業を実践することで、ゼロからのスタートではなく、小学校教育を幼児期の教育の上に積み上げ

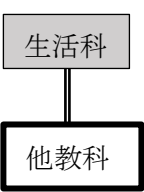
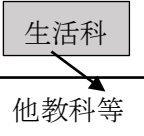
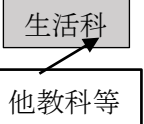
ていくというイメージを持ち、小学校教育において、幼児期に育まれた資質・能力を生かす指導を行うことにより、子どもの自ら学ぶ力はさらに育まれていくと考える。

(2) 合科的・関連的な指導や弾力的な時間割の設定

『小学校学習指導要領(2018)』には、「小学校入学当初においては、幼児期において自発的な活動としての遊びを通して育まれてきたことが、各教科等における学習に円滑に接続されるよう、生活科を中心に、合科的・関連的な指導や弾力的な時間割の設定など、指導の工夫や指導計画の作成を行うこと。」と示されている。

スタートカリキュラムにおいて、合科的・関連的な指導の工夫により単元を構成し配列する際には、生活科における学習活動が他教科等での学習材となったり、生活科で身に付けた資質・能力を他教科等で発揮したり、他教科等で身に付けた資質・能力が生活科において発揮されたりできるようにするなど、いくつかのタイプに分けられる(表2)。

表2 合科的・関連的な指導 発達や学びをつなぐスタートカリキュラムより(2018)

	捉え方	タイプ(例)	
合科的な指導	各教科等のねらいをより効果的に実現するための指導方法の一つで、単元又は1コマの時間の中で、複数の教科の目標や内容を組み合わせ、学習活動を展開するもの	【合科】 生活科を中心とした単元の学習活動において、複数の教科の目標や内容を組み合わせ、学習活動を展開することで、指導の効果を高める	
関連的な指導	教科等別に指導するに当たって、各教科等の指導内容の関連を検討し、指導の時期や指導の方法などについて相互の関連を考慮して指導するもの	【関連A】 生活科の学習の成果を他教科等の学習に生かす	
		【関連B】 他教科等の学習の成果を生活科の学習に生かす	

また、弾力的な時間割の設定として、特に入学当初は、登校してからの時間や朝の会から1時間目などについて、幼児期の生活リズムや園での過ごし方を参考に、幼児期に近い生活をつくるようにすることが大切であると示されている。このような「安心をつくる時間」の他にも、児童が思いや願いの実現に向けた主体的な学習活動をゆったりとした時間の中で進めていけるよう、2時間続きの学習活動の位置付けや児童の学習意欲が続いていくように、他教科等の指導において、生活科との関連を意識することがポイントとなっている。

これらのことから、生活科を中心とした合科的・関連的な指導を行うことで、各教科の資質・能力を関連させながら身に付け、弾力的な時間割の設定することで、児童が安心して主体的に取り組める学習環境を構成することができると考える。

3 生活科の学習について

(1) 低学年教育の充実と生活科

『小学校学習指導要領解説生活編(2018)』では、「生活科を中心としたカリキュラムデザインを行うことで、小学校へ入学した児童が、安心して学校生活を送るとともに、自信をもって成長し、学習者として確かに歩いていくようになることが期待される。これらのことは、生活科が、低学年における教育全体の充実を図る上で重視すべき方向を表しており、教科等間の横のつながりと、幼児期からの発達段階に応じた縦のつながりとの結節点であることを意識することが重要である。」と示されている。

これらのことから、生活科を核にし、他教科との合科的・関連的な指導を行うことで、学習の効果や、児童の安心・成長・自立へとつながることが期待できる。

(2) 資質・能力の三つの柱としての目標の趣旨

幼児期の資質・能力と小学校生活科の目標(資質・能力)を比較した(表3)。

共通点として、知識及び技能では、「体験の過程において、気付き、習慣や技能を身に付ける」、思考力、判断力、表現力等では、「考え、表現することができるようにする」、学びに向かう力、人間性等では、「生活を豊かにする態度を養う」という点がある。

また、相違点を見てみると、双方の違いというよりも、小学校生活科の特徴として、「身近な人々、社会及び自然」や「自分自身の生活」など、生活科の内容が提示されていることがわかる。このことから、幼児期の教育において育みたい資質・能力を踏まえて、生活科の内容を通して授業実践を行えば、小学校生活科の資質・能力がより滑らかに身に付くと考えられる。

表3 幼児期と小学校生活科の資質・能力の比較

	知識及び技能(の基礎)	思考力, 判断力, 表現力等 (の基礎)	学びに向かう力, 人間性等
幼児期 (資質・能力)	豊かな体験を通じて、感じたり、 <u>気付いたり、分かたり、できるように</u> なったりする	気付いたことや、できるようになったことなどを使い、 <u>考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする</u>	心情、意欲、態度が育つ中で、 <u>よりよい生活を</u> 営もうとする
小学校生活科 (資質・能力)	活動や体験の過程において、自分自身、身近な人々、社会及び自然の特徴やよさ、それらの関わり等に <u>気付く</u> とともに、生活上必要な <u>習慣や技能</u> を身に付けるようにする。	身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、自分自身や自分の生活について <u>考え、表現することができるようにする。</u>	身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけ、意欲や自信をもって学んだり <u>生活を豊かにしたりしようとする態度を養う。</u>

V 研究の実際

1 各園の実践

今回、島尻地区管内の15の園(保育所、幼稚園、こども園)を参観した。そこから学ぶことができた環境の構成の工夫、教師の言葉かけ、幼児が遊びを通してどのような学びがあるのかなど、実践事例の一部を紹介する。

(1) 環境の構成の工夫【戸外】

コンクリートの地面には、幼児がいつでもケンケンパができるようになっていた(写真1)。ケンケンパで遊ぶ子もいるが、この場所を通りながら、気軽に、そして、思わずケンケンパをやってしまうような環境が整えられていた。小学校にもこのような環境を取り入れることで、児童の楽しい、安心につながるのではないかと感じた。



写真1 ケンケンパ

(2) 環境の構成の工夫【室内】

幼児が、いつでも好きな材料を手にとって、製作できるよう環境が整えられていた(写真2、3)。テープもマジックも画用紙も、幼児の必要なタイミングで手に取り、遊びに向き合っている様子であった。「先生、画用紙ありますか?」と休み時間に児童が尋ねてきたのを思い出した。小学校にもこのような環境があったら、休み時間のわくわくにつながり、それが、児童の安心にもつながっていくと感じた。

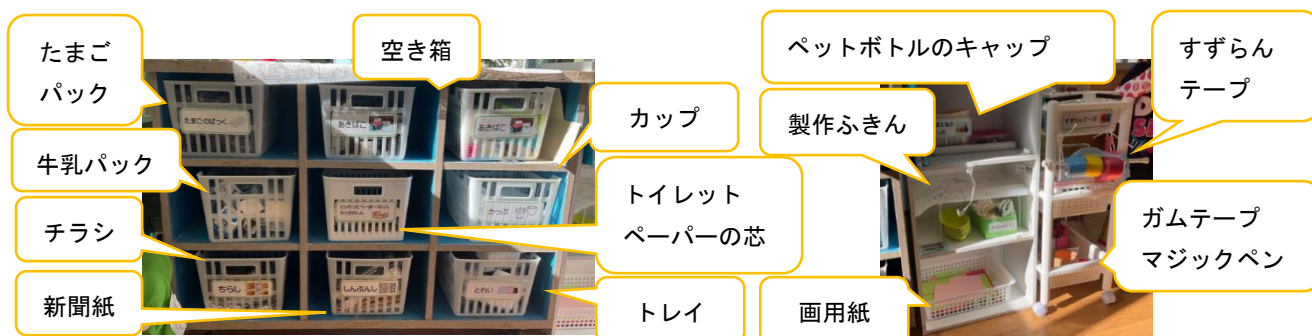


写真2 環境の工夫①

写真3 環境の工夫②

(3) ドキュメンテーション

秋の遠足でこどもの国へ行った時のことを、写真や絵、言葉を使って、ドキュメンテーションを作成していた(写真4)。自分が描いた絵を見たり、言葉で書かれた気付きや発見を読んだり、写真を見返して、振り返ったりする様子が見られた(写真5)。



写真4 幼児と一緒に作成したドキュメンテーション

コウモリを見た時のことを絵と言葉で振り返る場面では、「俺たちコウモリできるよ～！鉄棒こう！」と鉄棒遊びに発展する様子が見られた。コウモリをやった後は、逆上がりや豚のまるやきなど、色々な技を行い、体で表現して楽しんでいる様子だった。ドキュメンテーションを掲示していた効果であり、自分たちで作成したからこそその遊びの展開だったと感じた。

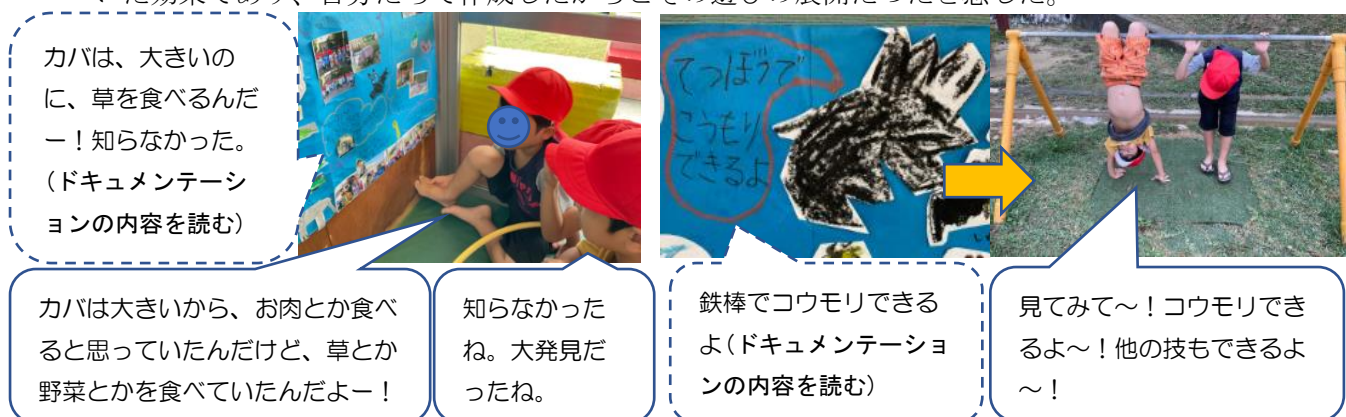


写真5 ドキュメンテーションを振り返り、次の遊びにつなげる様子

(4) ウェビングマップ

このクラスの黒板には、ウェビングマップが書かれていた(図3)。幼児と一緒に、「ブレーメン」の劇のお話に出てくる人物や役に必要な衣装や小道具はどんなものなのか、可視化されていた。「先生、〇〇も必要じゃない？」と必要な物が出てきたときは、どんどん足して記入して、幼児と一緒にウェビングマップを作成している様子が見られた。また、黒板には、家の写真やブレーメンの絵本、どろぼうの写真なども掲示され、幼児がイメージできるよう工夫されていた。

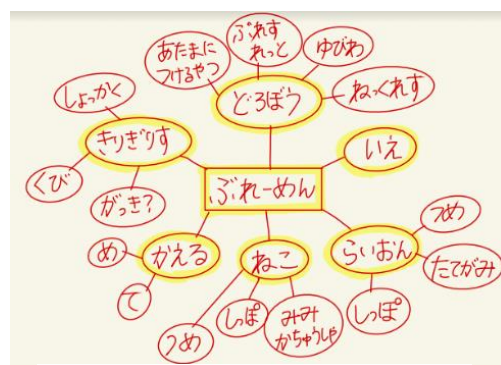


図3 ウェビングマップ転写

(5) 幼児の思いや願いを引き出す言葉かけ

幼児がつくった家の屋根が、この日の朝、落ちて壊れていたことから、クラスでの対話の様子が見られた。屋根をくつつけるために、大人が「こうしよう!」と教えるのではなく、「屋根が落ちていたけど、どうしたらいいかな?」と幼児に投げかけていた。「ガムテープをしっかりと貼ったら大丈夫だよ」と幼児も解決策を考えていた。

水やりは、土を触ってみてね。土がぬれていたらどうする?乾いていたらどうする?



写真6 朝の会の様子

朝の会では、1日の流れを確認する中で、植物の水やりを、土の状態を見て、水やりをする・しないを幼児に委ねていた(写真6)。この様子から、教師が幼児に気付かせるような言葉かけを行っていることが分かった。

教師が児童を信頼して、「気付かせる」「委ねる」ことで、児童が思考し、気付きへとつながり、行動を起こす必要性を感じ、主体的に取り組む第一歩になると感じた。

(6) 小学校につながる遊び

ある園での遊びの様子を観察してみると、空き箱で製作した動物たちが見られた(写真7)。これらは、遠足でこどもの国に行った後、空き箱を使って、見てきた動物たちをつくって遊んでいたようである。幼児は、箱の特徴をよく見て、キリンの体には、牛乳パックを使用したり、キリンの足にはトイレットペーパーの芯を使用したりする等、製作(動物づくり)を通して、形の特徴を捉えていた。

この遊びが小学校1年生の算数や図画工作につながると感じた。算数の「かたちあそび」(図4)では、「ボールの形」「さいころの形」「つつの形」「箱の形」と立体図形の形に着目して特徴や機能をとらえる学習を行う。図画工作の「はこでつくったよ」(図5)では、箱の形や色が様々なものに見えてきて、どの箱を使うか、組み合わせて工夫し、試行錯誤して表現する学習を行う。

このように、幼児期での遊びが、小学校では自覚的な学びへとつなげていくことが分かった。幼児期での遊びの経験があるからこそ、児童は箱の形や特徴をイメージすることができ、小学校以降の学習にスムーズに学びをつなげることができると感じた。



写真7 空き箱で製作した動物



図4 「かたちあそび」
(東京書籍)



図5 「はこでつくったよ」
(日本文教出版)

2 検証授業

(1) 単元名 「きせつとなかよし ふゆ」【学習指導要領の内容(5)(6)】

(2) 単元の目標

冬の自然を見付けたり遊んだりする活動を通して、冬とその他の季節との違いや特徴を見付けたり、遊びや遊びに使うものを工夫してつくったりして、冬の自然の様子や季節の変化、それを利用した遊びの面白さに気付くとともに、季節の変化を取り入れ自分の生活を楽しくしたり、みんなと楽しみながら遊びを楽しく創り出そうとしたりすることができるようにする。

(3) 単元指導計画

単元指導計画の中に、幼児期での学びを踏まえての視点や他教科との関連を示す。

小単元	時	主な活動	・指導上の留意点 ☆幼児期の視点、★他教科との関連
冬見つけにしよう！ (6)	1	冬のイメージを話す ・遊びや食べ物、行事など、冬休みの思い出について紹介しあう。 ・冬について知っていることや園などで経験したことのある遊びなどを出し合う。	☆ウェビングマップ作成①〔冬のイメージ〕 ☆ドキュメンテーションで春、夏、秋を振り返る
	2・3	冬見つけをする【校庭や公園】 ・冬になって変わったところを見つけに行く。	・校庭や公園でどんなものを見つけたかな。 【見つける】 ・春、夏、秋とどんなことが違うかな。
	4・5	・校庭や公園などで冬見つけを繰り返し行ったり、気付いたことを自分なりの方法で表したりする。	【比べる】 ・冷たい風はどんな感じかな。何に似ているかな。【例える】
	6	見つけた冬について話す ・校庭や地域で見つけた自然の様子、服装などの変化について紹介し合う。	☆ウェビングマップ作成②〔冬見つけ〕 ☆ドキュメンテーションの作成
冬と遊ぼう！ (5)	7	冬と遊ぶ ・冬の自然を生かした遊びや、寒くても楽しめる遊びをする。	・おもちゃの〇〇を、△△に工夫したら、××になりそうだよ。【見通す】 ★ 体育 鬼遊び(かげふみあそび) 一定の区域で逃げる、追いかけるなどの簡単な規則で鬼遊びする。 ☆ウェビングマップ作成③〔冬の遊び〕
	8・9 (本時)	冬のおもちゃづくり ・冬の自然を生かした遊びや、寒くても楽しめる遊びをする。 ・冬の自然や身近にある物を利用して、遊びや遊びに使う物を工夫してつくったり、つくった物を使って遊んだりする。(おもちゃづくり)	・どんな形の風がよく揚がるのかな？ キラキラしたテープを付けたら、きれいに見えるし、よく飛ぶと思うよ。【試す】 ★ 図画工作 ひらひらゆれて 風に揺れる飾りについて想像を膨らませ、試しながら、形や色、材料を選び、表し方を工夫して飾りをつくる。
	10・11	つくったおもちゃで遊ぶ ・冬の自然を生かした遊びや、寒くても楽しめる遊びをする。(つくったもので遊ぶ)	・おもちゃの〇〇を、△△に工夫したら、××になりそうだよ。【見通す】
まとめよう！ (1)	12	冬をまとめる ・これまでの活動を振り返り、冬の思い出や冬の自然と自分との関りなどについて、言葉や絵で表現したり、伝え合ったりする。	★ 国語 話す・聞く 伝えたい事柄や相手に応じて、声の大きさや速さなどを工夫すること。互いの話に関心を持ち、相手の発言を受けて話をつなぐ。 ☆ウェビングマップの活用 ☆ドキュメンテーションの作成

3 指導の実際

(1) ドキュメンテーションの作成

今回の「きせつとなかよし ふゆ」の学習の導入で、これまで学習した春・夏・秋の学習を振り返る手段として、ドキュメンテーションを児童と一緒に作成した。写真から、春はタンポポの綿毛をたくさん飛ばして遊んだり、オオバコ相撲をして遊んだりしたこと(写真8)、夏は虫取りに行ったことや、雨の日(梅雨)の散歩をして、晴れとの違いに気付いたこと(写真9)、秋は落ち葉やマツボックリ等を拾い、遊んだこと(写真10)を思い出すことにつながった。



写真8 ドキュメンテーション(春) 写真9 ドキュメンテーション(夏) 写真10 ドキュメンテーション(秋)

また、冬見つけの実施後もドキュメンテーションを作成することで、春・夏・秋・冬の違いや共通の部分を比較しやすく、気づきや発見したことを全体で共有することができた。また、児童は写真を見ながら、この時の様子を振り返り、発見や気づき、思いを言葉や絵で表現した(写真11)。友達と協力して作成し、教師や友達に認められることで自信や意欲が生まれ、成長の姿が見られた。児童と一緒に作成することで、発見した時はどんな気持ちだったのか、遊んでどうだったのかを引き出すことにもつながった。さらに、友達同士でも、「あの時〇〇だったよね」と一緒に振り返る場面から、対話が広がっていたことにも効果を感じた。



写真11 ドキュメンテーションを作成している様子



写真 11 ドキュメンテーションを作成している様子

(2) ウェビングマップの活用

各園を参観して、幼児期の現場でも、子ども達の思考を可視化し整理できるツールとして、ウェビングマップを活用していることが分かった。ウェビングマップは、思いついたアイディアを次々と記載していくことで、観察で収集した情報を再構成し、関係や傾向を見出していくことができる。今回、3つの場面でウェビングマップを活用した。最初は、「冬」についてのイメージを青色で共有した(写真12)。次に、冬見つけに行って感じたことや気づき、発見したことを緑色(校庭)、紫色(公園)で共有した。最後に、冬と関連する遊びについて赤色で共有した(写真13)。それぞれの場面で色分けをしてウェビングマップに記載することで、「ふゆ」について整理され、児童同士の「ふゆ」の共通理解につながった。さらに、冬についての考えの広がりをも色分けしたことで、単元のまとめで学習の段階を振り返ることができ、「冬見つけをして、〇〇に気付いた」「冬と関係するおもちゃをつくって、□□だとわかった」など、学びの足跡にもなり、主体的に単元を振り返ることに効果的だった。

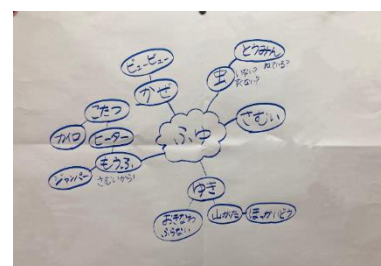


写真 12 児童と一緒に作成した
ウェビングマップ第1時

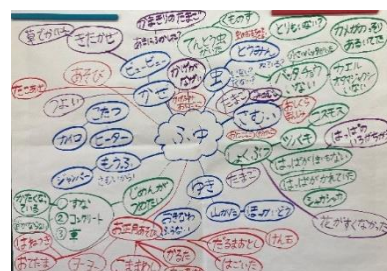


写真 13 児童と一緒に作成したウェビングマップの完成図

(3) 関連的な指導の工夫と弾力的な時間割の設定

関連的な指導の工夫として、生活科の学習の成果を「体育」や「図画工作」の学習に生かせるよう、単元の構成を配列した。

生活科の学習で、冬は寒いことに気付き(資料1)、身体を暖める方法として、おしくらまんじゅうや鬼ごっこがあることや、冬は影が長く伸びることに気付き、影踏み鬼ごっこをして遊ぶことで、冬の特徴を生かした遊びを行った。そこで、体育の「A 体づくりの運動遊び」や「E ゲーム イ 鬼遊び」と関連させることで、生活科の学習の成果を生かすことができた。

また、生活科の学習で、冬は風が強い・冷たいことに気付き、その後、図画工作の「ひらひらゆれて」の学習で、風に揺れる飾りを製作した(写真14)。風に揺れる様子から感じたことや想像したこと、表現したいことを見つけて、試行錯誤して楽しく取り組む活動を通して、北風について更なる気付きや発見へとつながった。生活科の学習の成果を図画工作に、図画工作の学習の成果を生活科の学習に、相互に生かすことができた。

さらに、弾力的な時間割の設定として、「冬見つけ」の学習で校庭や公園に行ったり、冬と遊ぶおもちゃをつくったりする際、2時間続きなどの学習活動を位置づけ、児童の学習意欲が続いていくように設定することで、児童が安心して主体的に取り組む姿が見られた。

今後は、幼児期の学びや育ちを関連付けた、生活科を中心とした合科的・関連的な単元指導計画を生活科の全ての単元で作成していきたいと考える。

(4) 教室環境(場の設定)と自己選択・自己決定

児童が気付きや発見を友達と共有しやすくするために、座席の配置をグループにしたり、全体での確認をする時に、サークルになって、皆で顔を見合わせて座ったりする工夫をした(写真15)。サークルになる前に「どうしてサークルになると思う？」と児童に尋ねると、「みんなで話すから」と声があった。幼児期では、教師が一方的に話すのではなく、幼児からも活発に声が聞こえ、その声に耳を傾け合い、互いの意見や思いを認め合う場となっている。このように、サークルになるよさをクラス全体で確認して、意見の交流を行った。

また、冬と遊ぶおもちゃづくりの際は、児童が色々な素材を自分で選んで、試したり、見通せたりできるよう、素材を児童と一緒に用意した(写真16)。幼児期では、いつでも好きな材料を手にとって、製作できるよう環境が整えられているので、単元の間はロッカーの上に素材を常備した。

子ども達は、冬と関係するおもちゃを自分がつくりたいものを自分で選んで決めていった。冬は風が強いから、風と遊ぶおもちゃ(凧あげ、飛行機、風車、風で動く車)をつくる子や、冬はお正月遊びをするという発想から、カルタをつくる子など、それぞれが自由な発想を基に製作に取り組んでいた。このように、自己選択・自己決定の場面を多く設定することで、安心して自己を発揮し、自分で考え、判断し行動するようになり、自立して学ぼうとする姿が見られた。

C1: 先生寒い〜!

T: 寒いね! 暖まるには、どうしたらいいかな?

C2: 走ると暖まるよ!

C3: おしくらまんじゅうも寒い時にやっていたよ!

(↑就学前の園での経験から)

C4: 鬼ごっこも暖まるんじゃない?

T: いいね! みんなで体を暖めよう!

資料1 児童の気付きから引き出す



写真14 飾りを試している様子



写真15 サークルでの対話の様子



写真16 素材(環境の工夫)

(5) 児童の声を聴く、友達を巻き込んで解決へ

児童から困り感や「はてな」が出てきたら、教師が「これは、こうだよ!」と教えるのではなく、「〇〇さん、困っているみたいだけど、どうしたらいいかな?」とクラスのみんなに問い返し、困り感を共有した(写真17)。「△△してみたらいいんじゃない?」「□□すると、できるよ!」と児童同士で解決策を考える様子が見られた(資料2)。



写真17 困り感を共有し対話する様子

T: Sさんの風で動く車は、どうしたら動くかな?
 C1: キャップがぴったりはまっているから、回りにくいんだと思う。
 T: なるほど! Sさんと同じ風で動く車を作っている人は、上手く進むかな?
 Rさんの実際に動かしてみよう!
 (実験→動かない)
 T: どうして動かないのかな?
 C2: 風が足りないんだと思う。
 C3: 上にヨットみたいな仕組みをつくったらいいと思う。
 T: Sさん、Rさん、ヨットみたいな仕組み、イメージできたかな?
 S: イメージできた! つくってみる!



写真18 対話後、修正する様子

資料2 児童と教師のやりとり

見て、真似てつくっている子

つくり方を習っている子

つくり方を教えている子



写真19 それぞれの学びの場面

(写真19)では、つくり方を教える子と、その作り方を習って、教えてもらいながら、つくっている様子が見られた。しかし、その二人の学びだけでなく、近くにいたEさんは、二人のやりとりを見て、聞いて、真似してつくっている様子が見られた。児童が対話をしながら気付いたり、その様子を見て学んだり、それぞれの学ぶ様子が見られる場面であった。

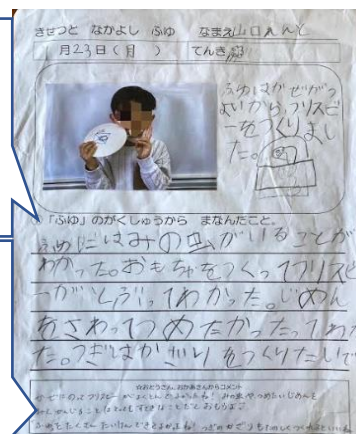
(6) 保護者との関わり

単元のまとめでは、「きせつとなかよし ふゆ」の学習を通して色々な発見、気づきがあったことを振り返り、「これまで学んだことを誰かに伝えたいね」と投げかけた。すると児童は、「お父さん、お母さん、家族に伝えたい!」と答えた。ここで、相手意識を持たせ、学習で学んだことを伝える振り返りを記入した。記入後、お家に持ち帰り、家族に報告し、コメ

ふゆには、みの虫がいることがわかった。
 おもちゃをつかって、フリスビーがとぶってわかった。じめんをさわってつめたかったってわかった。つぎはかざりをつくりたいです。(児童)

風によってフリスビーがよく飛んでよかったね。みの虫や冷たい地面を見て感じることは、とっても素敵なことだと思うよ。

「冬」をたくさん体験できてよかったね。
 次の飾りも楽しく作れるといいね。(母)



資料3 振り返りシート

ントをもらった(資料3)。児童の振り返りを読んで、家の人からコメントをもらうことで、学びや気づきを共有できる。また、休日に公園に行き、親子で冬見つけをした児童も数名いた。保護者を巻き込むことで、より活動や体験の幅が広がり、学びに向かう力を育むことへとつなげ、児童の成長へ結びつくことができると感じた。今後は、振り返りの活用の中で、児童の学びの変化や気づきの質などを見取る ICT の利活用を工夫していきたい。

4 保幼小連携を共有する「スタカリだより」の発信

本校職員向けに「スタカリ(スタートカリキュラム)だより」(資料4)を発行した。各園を参観して学んだ、遊具や植物などの環境の設定や幼児と一緒に作った環境、小学校につながる教室環境、小学校へつながる遊びの様子、教師の言葉かけ、また研修会での学びや意見交流会の様子を伝えた。この便りを通して、就学前の幼児の様子、遊びを通して総合的に学んでいる姿を共有することができた。幼児期から1年生へとつなぐだけでなく、1年生から2年生・・・5年生から6年生へと、どの学年でも「〇年生の時、どうやっていた？」と、子ども達に聞いてみることで、学びの連続性をつなげていくことが期待できる。



資料4 スタカリだより

VI 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

- (1) 幼児期の様子を知り、幼児期を踏まえた実践(環境の構成、ドキュメンテーション、ウェビングマップ、教師の言葉かけ等)を行うことで、児童は安心して自己を発揮する姿が見られた。
- (2) 幼児期の遊びを通じた学びを踏まえ、教科の展開の工夫により、児童の自覚的な学びの姿が見られた。
- (3) 自己選択・自己決定の場面を多く設定することで、児童が主体的に自己を発揮し、自立して学ぼうとする姿が見られた。

2 今後の課題

- (1) 児童の学びの変化、気づきの質などを見取る ICT を利活用していく必要がある。
- (2) 幼児期の育ちを関連づけた生活科を中心とした合科的・関連的な単元指導計画を工夫する必要がある。
- (3) 幼児期の環境の構成を参考にした、小学校における環境の構成の工夫が必要である。

〈主な参考文献〉

文部科学省	『幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引きの参考資料(初版)』	2022年
文部科学省	『幼稚園教育要領解説』	フレーベル館 2018年
文部科学省	『小学校学習指導要領』	東洋館出版社 2018年
文部科学省	『小学校学習指導要領解説 生活編』	東洋館出版社 2018年
国立教育政策研究所教育課程研究センター	『スタートカリキュラムスタートブック』	東洋館出版社 2015年

本検証授業研究会の記録

本検証授業実施期日：令和5年1月19日（木）

検証の視点	① 冬と遊ぶおもちゃの動きを予想したり、確かめたり、試したり、見通したりしながら、おもちゃづくりを楽しんでいるか。
-------	---

1 研究協議

- 参観者 Nさんは、失敗して修正してを繰り返していて粘り強く取り組む様子が見られた。凧糸の紐を長くしてもダメ、竹ひごを足すことで凧が揚がることに気づき、さっきよりも揚がっていることで、喜びを感じていた。
- 参観者 つくり方を悩んでいたYさんは、歩き出し、他の児童を見ていた。困っている友達にアドバイスをし、自分自身も素材を選び直し、みんなの考えを聞いて、別の物を製作。Yさんの中で、この時間は、粘り強さ、自己調整というのをしている、深い学びをしている時間だった。
- 参観者 児童目線で教師が話していて、子ども達とのやりとりがとても丁寧だった。
- 参観者 とても自由にやっている様子が新鮮だった。
- 指導主事 教師が何を大事にするかというのがしっかりあるから、待つことができる。この授業の時間で形にさせよう、焦り、その気持ちは子どもに伝わるから、教師の心の安定、授業の考え方があることを感じた。
- 指導主事 子ども達に「どうしたらいい?」「困っている子がいるよ。どうする?」と子ども達の考えを引き出していた場面で、小学校高学年でも中学校でも使える声かけをしていた。子ども達に委ねるということを学ぶことができた。

2 講 評

琉球大学教育学部 講師 宮城 利佳子

- 保幼小連携の視点から、「ドキュメンテーションの作成」「ウェビングマップの活用」「関連的な指導」「弾力的な時間割の設定」「教室環境」を取り入れることで、幼児教育のよさを上手く生かしつつ、小学校以降の学びへとつなげていた。
- 同時発生的に子ども達がいろんなところで学んでいて、個々の場所でそれぞれの学びが深まっていて、まさに子ども主体になっている。
- 子ども達は、めあてを共有した後すぐに活動に向かっていて、めあてを自分自身のものとしていた。前時とのつながりから、必要感のあるめあてになっているから、活動へ向かうことができる。活動の中で学びが深まっている。
- 対話が多いクラス。子ども達が思ったことをつぶやけて、先生が丁寧に拾い、子ども同士でも対話している。その対話の深まりが試行錯誤をより深めていく。
- 先生の声かけの仕方や支援から引いてみるというバランスができています。（個を見ながら全体を見る）
- 途中で課題を共有することで、自覚的な学びにつながり、小学校のこれから先の学びにつながっていく。
- 気づきの質の変化が深い学びへとつながる。気づきの質が変わるには、試行錯誤して、失敗して、そこから気付いて、深い学びにつながる。
- これからは、幼小連携の幼児期の学びをより自覚的な学びにつなげていくために、「他者から提案された活動をやってみたら深く学べた」と子ども自身が自覚して学びのイメージへと位置付けていくことが大事。